



法学部 教授 前川 亨 Toru Maekawa

「絶望が虚妄であるのは、まさに希望と同じだ」。これは魯迅が『野草』「希望」に引用するペテーフィ＝サンドールの言葉である。私たちは、この言葉を如何に解すべきだろうか。

私はかつて、魯迅が教鞭を執ったこともある北京大学に留学する機会に恵まれたが、その留学期間中に偶々、天安門事件に遭遇した。民主化を求める学生たちの徹夜の集会から聞こえてくる歌声を聞きながら、深夜、魯迅の『野草』を留学生寮で読んだことを今でも思い出す。私の中では『野草』と天安門事件は分ちがたく繋がっている。

毛沢東は魯迅を革命の聖人に祭り上げたが、今や我々はそれに捉われずに、魯迅と向き合える。日本における夏目漱石と中国における魯迅とは相似形をなしている。漱石が日本近代の光と影を結晶化させたように、魯迅は中国近代の光と影を結晶化させた。いずれも、それぞれの時代を反映しながら、しかも時代を超えて今の我々にも響く普遍性を持つ。彼らの作品が噛めば噛むほど味が出るスルメのような古典的名著である所以である。『野草』を中国語原文で読むのは困難でも、試みに竹内好訳でそれを味わってみよう。片山智行氏の『全訳』は、それを読み解くための手懸りを与えてくれる。



『野草』は、魯迅の想念を凝縮した哲学的散文詩であり、難解でしかも陰鬱である。そこに私たちは、魯迅が愛読したニーチェの「超人」の幻影を——竹内好の言葉でいえば「創造されなかった「超人」の遺骸」と「魯迅の自画像」を——見るであろう。

野草 / 魯迅著；竹内好訳
岩波書店，1955.7
(岩波文庫 赤版)

本 館 X/080/I95R
神田分館 X/080/I95R



魯迅「野草」全訳 / 片山智行著
平凡社，1991.11
(東洋文庫)

本 館 K/080/To82
神田分館 /921/Ka84